

2

国家教育部外语教学指导委员会
「21世纪主干基础课教材」

高年级日语精读

(第二版)

赵华敏 彭广陆 李奇楠 编著
顾海根 中原尚道 审校

上海译文出版社



CD
1枚付き

2

北京大学外国语学院日语系

高年级日语精读

(第二版)

赵华敏 彭广陆 李奇楠 编著
顾海根 中原尚道 审校

上海译文出版社



图书在版编目(CIP)数据

高年级日语精读. 2 / 赵华敏, 彭广陆, 李奇楠 编著. — 2版.

—上海: 上海译文出版社, 2015. 1

ISBN 978-7-5327-6655-0

I. ①高… II. ①赵… ②彭… ③李… III. ①日语—高等学校—教材

IV. ①H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 109322 号

この教材は国際交流基金日本語国際センターの助成を受けて制作されました。

本书专有出版权归本社独家所有
非经本社同意不得转载、摘编或复制

高年级日语精读二(第二版)

赵华敏 彭广陆 李奇楠 编著

顾海根 中原尚道 审校

上海世纪出版股份有限公司

译文出版社出版

网址: www.yiwen.com.cn

上海世纪出版股份有限公司发行中心发行

200001 上海福建中路193号 www.ewen.co

全国新华书店经销

上海颀辉印刷厂印刷

开本 787×1092 1/16 印张 19.5 插页 1 字数 507,000

2015年1月第1版 2015年1月第1次印刷

印数: 0,001—4,000册

ISBN 978-7-5327-6655-0/H·1196

定价: 45.00元(附MP3一张)

如有质量问题,请与承印厂质量科联系。T: 021-57602918

修订说明

《高年级日语精读》（第二册）自2004年第一次印刷出版至今已经将近10年了。在这近10年的使用过程中，深得广大使用者的厚爱，我们不断得到了反馈的信息。为了满足使用者的需要，应上海译文出版社的要求，我们对全书做了审定，增加了课文及辅助教材的译文和部分练习答案。译文和练习答案将另制成小册子，供需要者使用。

译文和练习答案由北京大学外国语学院日本语言文化系2012级翻译硕士班的陈家宾、赵维真、熊正华、袁蒙、古云英、赵春雨、周添、郑睿璞、朱蕾思、张斯文、袁梦婕完成，教材的编著者赵华敏、彭广陆、李奇楠审定。

虽然我们尽了最大的努力，力求使教材更加完善，使用者更加方便。但是由于时间有限，仍然有很多不尽人意之处。望使用者见谅，并给予批评指正。

编著者

2014年11月

前 言

《高年级日语精读》是国家教育部外语教学指导委员会主持的“21世纪主干基础课教材”之一，供日语专业三、四年级学生使用。各册教材由课文、注释、词汇、语法、惯用语的用法、练习、阅读课文、附录等内容组成。

本教材的编写以《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》中对“日语综合技能课”的要求为依据，在选材上尽可能涵盖了文化、社会、科学、语言、文学等多方面的内容，力求使学生在巩固基础阶段所学的语言知识的同时，进一步提高驾驭日语的综合能力。

本教材在编写过程中，得到先后在北京大学任教的日本文教专家渡边爱二、中田敏夫、中原尚道、酒井惠美子等先生的大力支持，他们参加每周一次的编委会，审订教材内容，对编写工作提出了许多合理的建议。另外，本教材所采用的课文都选自日本的出版物，原文作者和有关出版社都给予了积极的支持，上海译文出版社也为此教材的出版做了大量的工作。谨此一并表示谢忱。

由于编者水平有限，缺乏经验，加之时间仓促，因此书中难免有这样或那样的谬误之处或缺憾，敬请读者批评指正。

编者

2003年11月

第二册说明

一、正文

本册共分12课。由以下内容构成：

课文（本文） 本册课文选用了随笔、演讲、小说、评论等不同体裁的文章，内容清新，饶有趣味。难度上照顾到由基础阶段向高年级阶段的过渡。

注释（注釈） 诠释课文中出现的专业术语及专有名词，以帮助使用者更好地理解课文内容。

词汇（新しい言葉） 以《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》以外的词汇为主进行注释，并标出声调。

语法（文法） 对基础阶段未曾出现的语法项目进行了讲解、说明；对已出现过、但有一定难度、基础阶段不宜过多涉及的语法现象做了进一步的归纳、整理。为增强学生阅读、理解的能力，所使用的例句除个别经过加工之外，绝大部分均为实例。

惯用语用法（言葉の使い方） 利用大量实例，对常用的惯用语做了详尽的解释，弥补了以往教材的只作释义或只举少量例句的缺陷。有助于使用者加深对惯用语意义和用法的理解。

练习（練習） 分别设立了“言葉の学習”、“文法の練習”、“表現の工夫”、“内容の理解”4个项目，通过大量的专项和综合练习，以达到巩固所学知识的目的，从而在加深对日本人的语言心理和语言文化背景理解的基础上，进一步提高日语的综合运用能力。

二、阅读课文

共6篇。在选材上力求接近正课文的题材，以便教员作为补充教材加以利用，同时也为学生自学提供一些素材，以达到扩大词汇量之目的。

三、附录

由“文法項目索引”、“言葉の使い方の索引”、“新しい言葉の索引”三部分组成，以便于使用者复习、检索。

四、本书的编写、分工

课文、阅读课文由编写人员共同对所选素材加以筛选、讨论决定。具体分工和执笔者如下：

赵华敏：选材、整体设计、练习、全书统稿。

彭广陆：语法、惯用语用法、语法项目和惯用语用法的索引。

李奇楠：注释、词汇、词汇索引。

顾海根教授协助了本教材的立项工作，参与了选材工作、编委会的组织工作及全书的审订工作。原北大文教专家渡边爱二先生为本书的编写提供了大量的素材和宝贵的建议；原北大文教专家中原尚道先生对全书进行了审订。原北大硕士生，现林业大学教师魏萍协助了部分词汇的注释。原北大本科学学生蔡雷雷协助了课文和阅读课文的录入。

本书曾作为北京大学内部教材出版，在本校日本语言文化系试用两年和清华大学日语专业试用一年的基础上，经过修订，此次正式出版。尽管如此，仍有诸多不尽如人意之处，欢迎使用者提出宝贵意见，以便将来进一步完善。

本教材每课的词汇（新しい言葉）中所使用的符号和词汇属类简称如下：

一、符号

- ▼ 非常用汉字
- ▽ 非常用汉字音训
- 〈 〉 熟字训

二、音调

主要以《NHK 日本語発音アクセント辞典 新版》为准，采用①②③……的形式标出。

三、词汇属类简称

- | | |
|----------------|--------------------|
| 〈名〉 —— 名詞 | 〈自五〉 —— 自動詞・五段活用 |
| 〈副〉 —— 副詞 | 〈自サ〉 —— 自動詞・サ行変格活用 |
| 〈接〉 —— 接続詞 | 〈自上一〉 —— 自動詞・上一段活用 |
| 〈感〉 —— 感嘆詞 | 〈自下一〉 —— 自動詞・下一段活用 |
| 〈形〉 —— 形容詞 | 〈他五〉 —— 他動詞・五段活用 |
| 〈形動〉 —— 形容動詞 | 〈他サ〉 —— 他動詞・サ行変格活用 |
| 〈助数〉 —— 助数詞 | 〈他上一〉 —— 他動詞・上一段活用 |
| 〈連体〉 —— 連体詞 | 〈他下一〉 —— 他動詞・下一段活用 |
| 〈助動〉 —— 助動詞 | |
| 〈副助〉 —— 副助詞 | |
| 〈格助〉 —— 格助詞 | |
| 〈接助〉 —— 接続助詞 | |
| 〈連語〉 —— 連語（词组） | |

目次

C O N T E N T S

修订说明 i

前言 ii

第二册说明 iii

第1課

一枚の葉

本文	2
練習	18

第2課

娘たちへの手紙

本文	23
練習	38

第3課

北京の子

本文	43
練習	57

第4課

人類よ 宇宙人になれ

本文	62
練習	80

第5課

日本人と日本語

本文	84
練習	97

第6課

言葉と自己規定

本文	101
練習	119

第7課

比喩の世界

本文	123
練習	132

第8課

言葉についての新しい認識

本文	136
練習	150

第9課

『オンリー・ミー』より
(正義・逆鱗)

本文	154
練習	167

第10課

友情の杯

本文	172
練習	184

第11課

屋根の上のサワン

本文	189
練習	210

第12課

砂漠への旅

本文	215
練習	226

補助教材

- 一 お辞儀
- 二 畳と床
- 三 日本のふるさと
- 四 気象と人間
- 五 絶対値
- 六 女ことば 男ことば

	229
--	-----

付録

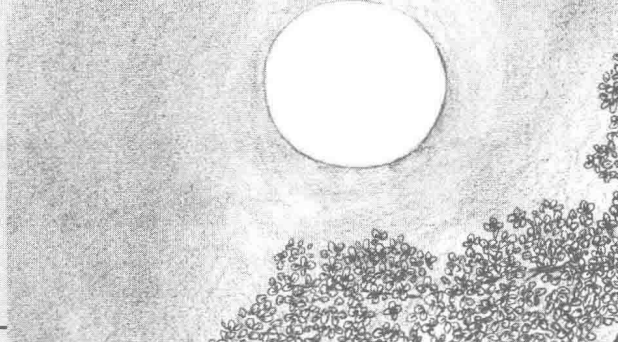
■ 文法項目索引 247

■ 言葉の使い方の索引 249

■ 新しい言葉の索引 251

第 1 課

一枚の葉



1908—1999。神奈川県生まれ。本名、新吉。日本画家。主な著書に『風景との対話』『泉に聴く』などがある。

「一枚の葉」 出典は、『私たちの風景』（1975年刊）。

文法

P8—P14

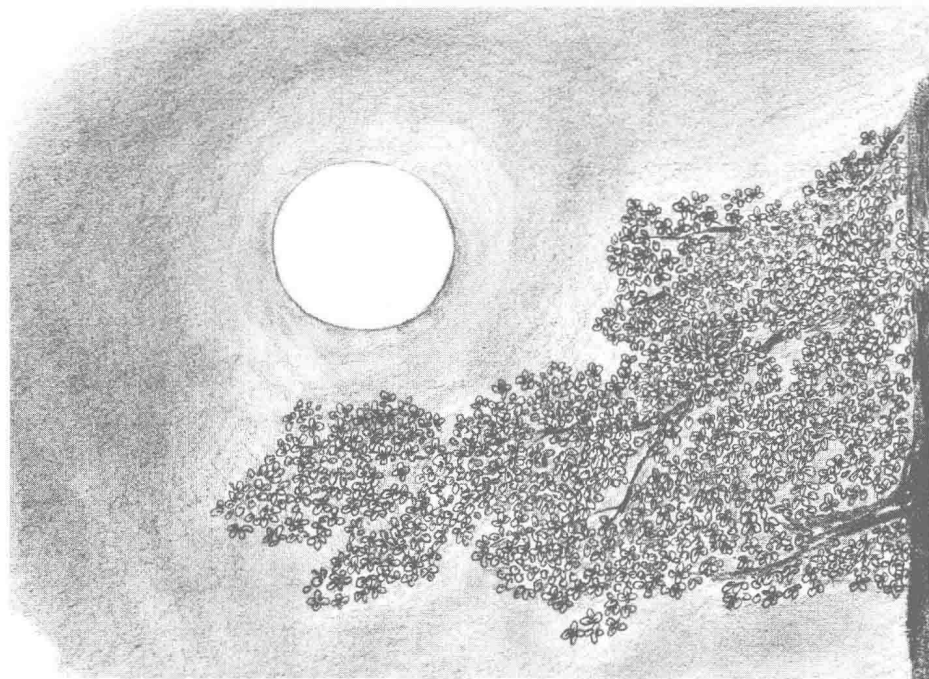
1. Nとして (の)
2. Nだったか
3. Vかのように
4. Vているではないか<発見>
5. Vたのでは
6. Vて<副詞的用法>
7. ～かに見える
8. - がる
9. に<結果>
10. - ばなれ (離れ)
11. Vはてる (果てる)
12. - ばむ
13. Vてこそ
14. Nをつうじての (通じての)

言葉使い の方

P14—P17

1. ころあいをみる (頃合を見る)
2. かおをだす (顔を出す)
3. ひといきつく (一息つく)
4. めにうつる (目に映る)
5. みむきもしない (見向きもしない)
6. めにふれる (目に触れる)
7. きょうをそえる (興を添える)

本文



京都を主にした連作を描いたころのことである。円山の夜桜として知られている、あの、しだれ桜の満開の姿と、春の宵の満月が呼応する情景を見たいと思った。

四月十日ごろだったか、その夜が十五夜であることを確かめて京都へ向かった。昼間、円山公園へ行ってみると、幸いに桜は満開であった。春の陽ざしが今宵の月夜を約束するかのように明るかった。夕方までの時間を寂光院や三千院を訪ねて過ごし、ころ合いを見て京都の町へ帰って来た。

下鴨辺りだったか、ふと車の窓からのぞくと、東の空にぽっかりと円い大きな月が浮かんでいるではないか。私は驚いた。円山の桜を前にして東山から顔を出したばかりの月が見たかったのであって、空高く月が昇ったのでは意味がなくなってしまう。大原で時間を取りすぎたことが悔やまれた。

円山公園へ急いでたどり着くと、私はほっと一息ついた。ここでは山が間近であるため、幸いに月はまだ姿を見せていなかった。紺青に暮れた東山を背景に、この一株のしだれ桜は、淡紅色の華麗な粧いを枝いっぱいにつけて、京の春を一身に集め尽くしたかに見える。しかも、地上には一片の落花もなかった。

山の頂が明るみ、月がわずかにのぞき出て、紫がかった宵空を静かに昇り始めた。花は今、月を見上げる。月も花を見る。この瞬間、ぼんぼりの灯も人々の雑踏も跡形もなく消え去って、ただ、月と花だけの清麗な天地となった。

これが巡り合わせというものであろうか。花の盛りは短く、月の盛りと出会うのは、なかなか難しいことである。また、月の盛りは、この場合ただ一夜である。もし曇りか

雨になれば、見るができない。その上、私がある場に居合わせなければならない。

花が永遠に咲き、私たちも永遠に地上に存在しているなら、両者の巡り合いに何の感動も起こらないであろう。花は散ることによって生命の輝きを示すものである。花を美しいと思う心の底には、お互いの生命を慈しみ、地上での短い存在の間に巡り合った喜びが、無意識のうちにも感じられているに違いない。それならば、花に限らず名も知らぬ路傍の一本の草でも同じことではないだろうか。

風景によって心の目が開けた体験を、私は戦争の最中に得た。自己の生命の火が間もなく確実に消えるであろうと自覚せざるをえない状況の中で、初めて自然の風景が、充実した命あるものとして目に映った。強い感動を受けた。それまでの私だったら、見向きもしない平凡な風景ではあったが――。

また、戦争直後、すべてが貧しい時代に、私自身もどん底に居たのだが、冬枯れの寂寥とした山の上で、自然と自己とのつながり、緊密な充足感に目覚めた。切実で純粋な祈りが心に在った。風景画家として私が出発したのは、このような地点からであった。

私が好んで描くのは、人跡未踏といった景観ではなく、人間の息吹がどこかに感じられる風景が多い。しかし、私の風景の中に人物が出て来ることは、まずないと言ってよい。その理由の一つは、私の描くのは人間の心の象徴としての風景であり、風景自体が人間の心を語っているからである。

私が常に作品のモチーフにしたり、随筆に書いているのは、清澄な自然と素朴な人間性に触れての感動が主である。戦後の時代の激しく急な進みの中で、私自身、時代離れのした道を歩んでいると思う時が多かった。しかし、今では、それで良かったと思っているし、また、それをこれからも貫き通したいと念じている。

人はもっと謙虚に自然を、風景を見つめるべきである。それには、旅に出て大自然に接することも必要であり、異なった風土での人々の生活を興味深くながめるのもよいが、私たちの住んでいる近くに、例えば、庭の一本の木、一枚の葉でも心をこめてながめれば、根源的な生の意義を感じ取る場合があると思われる。

私は庭の木をながめている。いや、枝に付いた一枚の葉を見ている。今は、その葉は美しい緑に、夏の陽を受けて輝いている。私は、その葉が、まだ小さな芽として初めて私の目に触れたころを思い出す。それは、昨年の冬の初めであった。今の葉のある場所に乾いた茶色の葉が付いていたのが、枝を離れて散り落ちていった時である。そこに、まだ小さな固い芽であったおまえが、みずみずしい生命を宿して誕生していた。

寒い風が吹き、雪の降る日があったが、おまえは黙々として春を待ち、徐々に充実した力を内に蓄えていく。ある朝、小雨がやむと、点々と真珠の玉が枝に並んで光っているのが見える。それは芽生えの一つ一つに雨水がたまっていたのである。芽の膨らみが進んできたのを感じた。春はもう間近である。

ようやく春が来る。芽の開く時の喜び。しかし、あの、地上に散っていった葉は、今は朽ち果てて土に還っていく。

おまえは、すくすくと伸びて初夏の陽を明るく透かす若葉となる。生命の充実を感じるとともに、その柔らかい葉が虫におかされやすいのも、この季節である。幸いにおま

えは無事に夏を迎え、今、仲間とともに青々と繁り合っている。

私はおまへの未来をも知っている。夏の盛りになると、葉陰ではアブラゼミが騒がしく鳴き立てるだろう。しかし、台風が過ぎるころになると、ヒグラシや、ツクツクボウシの、どこか寂しげな歌声に変わる。涼しくなる。蟬の声が聞こえなくなると、今度は根本の方から虫の合唱が、しめやかに秋の夜の興を添える。

おまへの緑は、なんとなく疲れた色合いになってくる。やがて黄ばみ茶色になって、寒い雨の中にうなだれている。一夜、風が雨戸を鳴らすと、翌朝、おまへの姿は、もう、枝には見られない。ただ、その跡に小さな芽が付いているのを私は見いだすだろう。その芽が開くころ、地上に横たわっているおまへは土に還っていくのである。

これが自然であり、おまえだけではなく、地上に存在するすべての生あるものの宿命である。一枚の葉が落ちることはけっして無意味ではなく、その木全体の生に深くかかわっていることが分かる。一枚の葉に誕生と衰滅があつてこそ、四季を通じての生々流転が行われる。

一人の人間の死も、人類全体の生にかかわっている。死はだれしも好ましくないに違いないが、自分に与えられた生を大切に、同時にひとの生をも大切に、その生の終わりの時、大地へ還っていくことは幸いと思わねばならぬ。それは、私が庭の木の一枚の葉を観察して得た諦観と言うよりは、一枚の葉が生と死の輪廻の要諦を私に向かって静かに語ってくれた言葉なのである。

[東京書籍『新訂現代国語三』による]

- 注** 円山(まるやま) 京都市東山区の地名。ここでは、そこにある円山公園のこと。東山の山麓に当たる。／圓山(公園)。
四月十日 ここでは、1966年の4月10日を指す。／4月10日。
寂光院・三千院(じゃっこういん・さんぜんいん) ともに京都市左京区大原にある天台宗の寺。／寂光院、三千院。
下鴨(しもがも) 京都市左京区の地名。市の北東部にある。／下鴨(地名)。
東山(ひがしやま) 京都市、鴨川の東に連なる丘陵。京都の東方に当たる山の意。ふつう北は比叡山(ひえいざん)から南は稻荷山(いなりやま)までを指し、古来、東山三十六峰の称がある。風光にすぐれ、名所旧跡が多い。西山、北山に対して言う。
大原(おおはら) 京都市左京区の一地区。市の最北部にあり、高野川に沿う小さな盆地をなす。後鳥羽天皇(ごとばてんのう)陵、寂光院・来迎院(らいごういん)・三千院の古刹がある。「おはら」とも言う。／大原。
京(きょう) みやこ。ここでは、京都のこと。／京都。

新しい言葉

□ れんさく①【連作】〈名・他サ〉

1. 同じ土地に同じ種類の作物を毎年続けて栽培すること。／連続栽培。 2. 文芸・美術などで、一人の作者が一連のテーマに基づいていくつかの作品を作ること。また、その作品。／系列創作；系列作品。

□ よざくら②【夜桜】〈名〉 夜、眺める桜の花。夜、照明をつけて桜を見物する風習がある。／夜晩的櫻花。

□ しだれざくら④【枝垂れ桜】〈名〉 桜の一種。枝は細くて垂直に垂れ下がる。／垂枝桜。

- まんかい⑩【満開】〈名〉花がすっかり開くこと。また、すべての花が開くこと。／盛开。
- じゅうごや⑩【十五夜】〈名〉 1. 陰暦十五日の夜。満月の夜。／阴历十五的晚上；月圆之夜。 2. 特に、陰暦八月十五日の夜を指す。この夜、月見をする風習がある。／特指阴历八月十五赏月之夜。
- ひざし⑩【日差し・日▽射し・▽陽▽射し】〈名〉日の光がさすこと。また、その光。／日照；阳光。
- ころあい⑩【▼頃合い】〈名〉 1. ちょうどよい時機。／适当的时机；良机。 2. ちょうどよい程度。／适当的程度；程度恰好。
- ぽっかり(と)③〈副〉 1. 水面・心などに急に現れたり、空中に軽やかに存在したりするさま。／浮现；漂浮状。 2. 口を大きく開けるさま。また、大きな穴などが開くさま。／大张着嘴；裂开大缝状；开口状。
- くやむ②【悔やむ】〈他五〉失敗したことや十分にできなかったことなどを後から残念に思う。後悔する。／懊悔；后悔；遗憾。
- ひといき②【一息】〈名〉 1. 一回の呼吸。ひと呼吸。／一口气；一次呼吸。 2. ちょっと休むこと。ひと休み。／稍事休息。
- つく①②【▽吐く】〈他五〉 1. 口から息を強く出す。／呼吸；呼出。 2. (うそなどを)言う。／说(谎)。
- まぢか①⑩【間近】〈名・形動〉時間や距離がすぐのところ近くに近づいていること。／接近；临近；靠近。
- こんじょう⑩【紺青】〈名〉明るく、鮮やかな藍色。また、その色の顔料。／紺青；天蓝；蔚藍。
- くれる⑩【暮れる】〈自下一〉太陽が沈んで、あたりが暗くなる。／日暮；天黑下来。
- かぶ【株】〈名〉根のついた草木全体。特にその根元の部分。また、それを数える語。／树木；棵(量词)。

- よそおい⑩③【装い・▽粧い】〈名〉外觀を整えること。また、身なりを美しく飾ること。また、その外觀・姿。／打扮；化妆；外观；装束。
- つくす②【尽くす】〈他五〉 1. ありったけのものを出し切ってしまう。／尽；竭。 2. (自動詞的に)自らをなげうってそのものために精一杯の働きをする。尽力する。／(为……)效力；(为……)尽力。 3. (動詞の連用形に付いて複合動詞を作る)すっかり…する。／……尽；……光；完全……。
- しかも②【▽然も・▼而も】〈接〉 1. 前に述べたことにさらに他のことが加わる意を表す。その上。／而且。 2. 前に述べたことと対比的なことが次に続く意を表す。それでもなお。／尽管如此；却。
- いっぺん③⑩【一片】〈名〉ひとひら。ひときれ。／一片；一瓣。
- あかるむ③【明るむ】〈自五〉(日や月の光で)明るくなる。／亮；转晴。
- -がかる〈接尾〉(色彩を表す名詞に付いて)……の色を帯びる意を表す。／发(紫 etc.)、带有……颜色。
- ぼんぼり⑩【<雪洞>】〈名〉絹または紙張りの覆いをつけた手燭(てしょく)・燭台。また、柄と台座をつけた行灯(あんどん)。／带绢或纸糊灯罩的蜡灯；烛台；小型座灯。
- ざっとう⑩【雑踏・雑▼沓】〈名・自サ〉たくさんの人が出て込み合うこと。／人多；拥挤。
- きえさる③【消え去る】〈自五〉(姿・形、また、ある気持ちなどが)消えてなくなる。／消失。
- せいいい⑩【清麗】〈形動〉清らかでうるわしいこと。／清纯；秀丽。
- めぐりあわせ⑩【巡り合わせ】〈名〉人の意志とはかかわりなくめぐってくる運命。／命运；机缘。
- いたわせる④【居合わせる】〈自下一〉ちょうどその場にいる。／恰好在场。

- **いつくしむ**④【慈しむ・▽愛しむ】
〈他五〉 愛情を持って、かわいがる。大切に
にする。／疼爱；怜爱。
- **さいちゅう**①【最中】〈名〉 動作や状
態が最も盛んな時。ある行為・動作が行われてい
る、ちょうどその時。「さなか」とも言う。／最
……的时候；正在……的时候。
- **みむき**①②【見向き】〈名〉 振り返っ
てその方を見ること。またそちらに関心を示すこ
と。多く下に打ち消しを伴って使う。／回头看；
回顾；关心。
- **どんぞこ**①【どん底】〈名〉 1. 物の
いちばん底。／最底下；底层。 2. 最悪・最低
の状態。／最恶劣的状况；最底层。
- **ふゆがれ**①【冬枯れ】〈名〉 冬に草木
の葉が枯れること。また、そのさびしい眺め。／
冬季草木枯萎（的凄凉景象）。
- **じんせきみとう**【人跡未踏】〈名〉
人が一度も足を踏み入れたことがないこと。／人
迹罕至。
- **いぶき**①【息吹】〈名〉 息づかい。呼
吸。また、いきいきと活動するけはい。／气息；
生机；活力。
- **モチーフ**②【法motif】〈名〉 動
機。主旨。芸術・文学などの創作の動機となる
主要な題材・思想。「モチーフ」とも言う。／主
旨；主题；中心思想。
- **せいちょう**①【清澄】〈名・形動〉
清らかに澄みきっていること。／清澈；清湛。
- **-ばなれ**【-離れ】〈接尾〉（名詞に付
いて）離れていくこと。また、大層かけ離れてい
ること。／离；远离；脱离。
- **つらぬきとおす**⑤【貫き通す】〈他
五〉 1. （物を反対側まで）突き抜けて通す。
／穿；贯穿；贯通。 2. （目的・願望などを）終
わりまで変えずに続ける。／贯彻；坚持。
- **ねんじる**①③【念じる】〈他上一〉
ある事柄の成就や実現を強く願う。／希望；祈
求。
- **みつめる**①③【見詰める】〈他下

- 一〉 1. 対象から視線を離さないでじっと見続
ける。凝視（ぎょうし）する。／盯着看；凝视；
注视。 2. 目をそらさないで物事をはっきりと
見る。直視する。／正视；审视。
- **ことなる**③【異なる】〈自五〉 ある
事柄が基準となる事柄や他の同様の事柄と同一で
ない。違う。／不同；不一样。
- **こめる**②【込める】〈他下一〉 1. 銃
器に弾丸をしっかりと収め入れる。装填（そうて
ん）する／装（子弹）。 2. その中に十分に注
ぎ入れる。注入する。また、ある事柄に感情や情
熱を注ぎ入れる。／注入；贯注；倾注；投入。
- **かわく**②【乾く】〈自五〉 物に付いた
り含まれたりしていた水分がなくなる。乾燥す
る。／干；干燥；干枯。
- **みずみずしい**⑤【▼瑞▼々しい】
〈形〉 新鮮で生き生きしているさま。つやが
あって、若々しい。／新鲜；水灵。
- **やどす**②【宿す】〈他五〉 1. 内部に含
み持つ。／包含；蕴含。 2. 子をはらむ。身ご
もる。／怀孕；孕育。
- **もくもくと**①【黙々と】〈副〉 黙っ
て何かをし続けるさま。／默默地。
- **じょじょに**①【徐々に】〈副〉 ゆっ
くりと進行するさま。少しずつ変化するさま。だ
んだん。／渐渐；徐徐。
- **たくわえる**④③【蓄える・▽貯え
る】〈他下一〉 1. 将来に備えて金銭や物
品をためておく。／储蓄。 2. 知識や力などを
いつでも発揮できるようにためておく。また、考
えなどを（いつでも取り出せるような状態で）心
に隠し持つ。／积蓄；储备。
- **てんとんと**①③【点々と】〈副〉
1. 点を打ったようにあちこちに散らばっている
さま。／星星点点状。 2. 雫（しずく）がした
たり落ちるさま。／滴落状。
- **めばえ**③②①【芽生え】〈名〉 芽が
出始めること。また、その芽。／发芽；出芽；
芽。
- **ふくらみ**①【膨らみ・▽脹らみ】

- 〈名〉 膨らむこと。また、その部分や程度。
／鼓起；膨胀。
- **ようやく**①【▽漸く】 〈副〉 長い時を経たのちに、また、あれこれ手間をかけたのちに、望んでいたことが実現するさま。やっと。／终于；好不容易。
- **くちはてる**④①【朽ち果てる】 〈自下〉 もとの形をとどめないまでに腐ってしまう。／腐烂；腐朽。
- **すくすく**（と）②① 〈副〉 樹木などが勢いよく伸びるさま。また子供が順調に元氣よく成長するさま。／迅速成長貌；茁壮成长貌。
- **すかす**①【透かす】 〈他五〉 光を通す。また、そのようにして中が見えるようにする。／透过。
- **おかす**②①【冒す・侵す】 〈他五〉 あるものが人や植物などを害する。損なう。むしばむ。／侵袭；侵害。
- **あおあおと**③【青々と】 〈副〉 いかにも青いさま。また、一面に青いさま。／（一片）碧绿。
- **しげる**②【茂る・▽繁る】 〈自五〉 草木が伸びて枝・葉がたくさん出る。／草木枝叶茂盛；繁茂。
- **はかげ**①【葉陰】 〈名〉 木や草の葉のかげ。／草木叶子的阴影。
- **アブラゼミ**③【油▼蟬】 〈名〉 セミの一種。夏、日本各地で最も普通に見られる。暑さをかき立てるように樹上でジージーと鳴く。／秋蟬。
- **さわがしい**④【騒がしい】 〈形〉 人が落ち着いていられないほど、音や声が多かったり続いたりするさま。うるさい。やかましい。耳ざわりだ。／喧闹；吵闹；嘈杂。
- **なきたてる**④【鳴き立てる】 〈自下〉 虫・鳥獸などが、声高にしきりに鳴く。／鸣叫。
- **ヒグラシ**①②【▼蝸】 〈名〉 セミの一種。夏から秋、早朝や夕方にカナカナと高い声で鳴く。／茅蝸。

- **ツクツクボウシ**⑤【つくつく法師】 〈名〉 セミの一種。晩夏から秋にかけて多く現れ、オーシーツクツクと鳴く。／寒蟬。
- **しめやか**② 〈形動〉 1. しんみりと落ち着いているさま。／寂静；悄然。 2. 悲しみに気分が沈んでいるさま。／肃穆。
- **いろあい**①③【色合い】 〈名〉 1. 色のぐあい。色調。／色调。 2. 傾向や性質の様相。／性质、倾向。
- **きばむ**②①【黄ばむ】 〈自五〉 黄色みを帯びる。／带有黄色；变黄；发黄。
- **うなだれる**①④【▽項垂れる】 〈自下〉 頭を前に低く傾ける。特に、心配・落胆・悲しみ・恥ずかしさなどのために、頭を前に低くたれる。／（因忧虑、悲观、羞耻等）垂首；低头。
- **あまど**②【雨戸】 〈名〉 風雨の防止や防犯・保温などのために、窓や縁側など家屋の外側に立てる戸。／防雨窗；防护门。
- **ならず**①【鳴らす】 〈他五〉 吹いたり叩いたりして音を出す。／使响；使发出声音。
- **みいだす**③①【見▽出す】 〈他五〉 隠されたものなどを新たに見つけ出す。発見する。／找到；发现。
- **よこたわる**④【横たわる】 〈自五〉 横になる。横に伏す。／躺；伏。
- **せいせい**るてん【生々流転】 〈名〉 万物は永遠に生死を繰り返し、絶えず移り変わってゆくこと。「しょうじょうるてん」とも言う。／生生不息。
- **しも** 〈副助〉 上に来る語を取り立てて強調する。／表示强调。
- **このましい**④【好ましい】 〈形〉 気に入っている。望ましい。／喜爱；希望。
- **ていかん**①【▼諦観】 〈名・他サ〉 物事の本質をはっきりと見きわめること。／諦视。
- **ようたい**①【要▼諦】 〈名〉 物事の最も大切な所。「ようてい」とも言う。／真谛；要点。